

感性の人類学のための予備的覚え書き

川 田 順 造

KAWADA Junzo

(事業推進担当者)

はじめに

かねてから私は、自然史のなかでのヒトの位置づけへの関心から、知覚=運動体 sensorimotor organism としてのアメーバからヒトまでの生物を共通の視野でとらえ、そのなかでヒトの文化の特徴を明らかにするためには、感性にもとづいて文化の理論化をはかるべきであると考えてきた。COEで私の所属していた第2班で、身体技法と共に感性の領域、とくに嗅覚、味覚について研究することができた機会に、感性の人類学というべき構想への見取り図を描くことを、まだ粗い下絵の段階ではあるが、年報の場をかりて試み、批判と教示を受けたい。

I 知覚=運動体としてのヒト

現生人類であるヒト *Homo sapiens* の先祖は、他の霊長類の仲間とともに、哺乳動物としては稀な樹上生活を営み、その結果、前肢でものをつかむ能力や、平面に並んだ両眼によって、近距離の対象を詳細に識別する視力を具えた動物として進化した。

アフリカのサバンナで約600万年前に、チンパンジー属と別れ、樹から降りて直立二足歩行を始めたと考えられているヒトの祖先は、ものをつかむことができる、自由になった両手と、声帯が下がり構音器官が多様化して可能になった、叫び声、啼き声とは異なる分節された声である言語をもつようになった。他の生物にはないこの二つの能力の複合が、地球上のさまざまな地域に拡散移住し、それぞれの自然条件に適応したヒトの多様な文化を生んだ。

II 知覚と運動の相互作用が生みだす文化

ヒトが生みだした文化、即ち、知覚と運動=反応が相互に働いて作る表象は、知覚を構成する諸感覚に基づいて生みだされる。諸感覚のうち体内感覚 organic sensations は、個体と種の維持のための基本的本能と結びつき、摂食・性交・分娩・排泄といった生物にとって最も原初的な行為を生む。原則として道具なしで素裸で可能なこれらの行為は、社会に或る範囲と度合いで共有されている「民俗」に応じて異なる身体技法の原動力にはなるが、直接には表象としての文化を生まない。だが身体技法もヒトの文化研究の重要な一領域と見る立場からは、体内感覚も含めて、感性の諸領域に見られる特徴を指標として、ヒトの文化を生物一般と連続する相で把握し、研究対象とすることができるだろう。

このような視点からヒトの文化を捉えようと試みるのは、もう一つのねらいとして、ヒトに顕著な自覚された「個我」と、他者との共生関係において獲得する *habitus* の総体としての「民俗」との関係性を、感性を指標とすることで、一種の層序として明らかにできまいだろうか考えるからである。

そのための考察を進める前提として、感性の領域ごとに、それぞれの特徴、各感性が生む表象のありようを概観すれば、およそ以下のようにまとめることができるだろう。

(1) 体内感覚 (個体と種の存続に直結): 食 (空腹・飢餓感/満腹・充足感)、性 (性欲/恍惚感・満足感)、分娩 (つわり、胎動感、陣痛など)、排泄 (便秘/爽快感)、全身運動 (それがもたらす快感)。これら自体は表象としての文化を生まないが、とくに食と性に關

わる体内感覚は、以下の(2)から(6)までの感覚と結びついて、食文化、香文化、音楽、美術、文学における、食、香、性をめぐる多様な表象の原動力となりうるものである。

(2) 嗅覚：生物として最も原初的な感覚であり、多くの場合、同じ匂いが複数の個体に共通のものとして感知される一方で、液香、薫香をめぐると人為的洗練、香道に著しい言語化、人体や風景の記憶などとの連合にもとづいて、極度に個別化もされうる。フェロモン臭が異性と結合欲を喚起するといった、きわめて生物的一般的側面と、特定の個人と結びついた匂いが、性欲だけからでは説明できない特定の異性に執着する恋愛感情という、ボノボからヒトに至って強く表れる「文化」に規定された側面との両極性を、嗅覚はもっている。嗅覚のもたらす印象は、進化の上で古層とされている大脳辺縁系に直結し、非分節的で漠としており、直接の分節的印象にもとづく言語化が困難だが、それだけに感覚の連合にもとづく、ヒトの理性をうるたえさせるほどの広く強い記憶喚起力をもっている。

(3) 味覚：生物の個体維持に不可欠な摂食行為と結びついた感覚として、きわめて動物的だが、同時に美味探求にもとづく人為的洗練、それに伴う言語化とも結びつく。作る行為と食べる行為、共に同じ味覚を享受する行為など、他者とのコミュニケーションが基底をなしていることが多く、おふくろの味、「同じ釜の飯」、郷土料理などを通じて、ノスタルジーや共属感覚の形成に大きな役割を果たす。

(4) 触覚（指先を除く皮膚感覚）：感覚自体は個別的でありながら、大気寒暖乾湿の感触など、刺激を他者と共有することが多く、集合性を帯びて共属感覚の基底ともなりうる。生活の場としての自然とヒトの相互交渉の上に成り立つ「風土」にとって、根源的なはたらきをする。共感覚 synesthesia の発信体になりうる感覚として、漠としていながら喚起力が強い点で嗅覚と共通するが、言語化が容易な点では嗅覚と異なる。

(5) 聴覚：指先の皮膚感覚（点字、ピアノやタイプライター、コンピューターのキーボードなど）とも関連し、言語とも結びつく。個別的でありながら、基本的に他者との関係性において意味を帯びる感覚領域である。とくに言語は、他者とのコードの共有がなければ、

コミュニケーションの媒体としての機能をもたえない。聴覚は受信における能動的な側面と同時に、「聞こえてくる音」や「音風景」"soundscape"が意識下にしみこませる印象、音声言語の力による同意、服従にみられるように、受動的でもあり得る。ふるさと感覚、懐かしさの感覚など、共属感覚だけでなく、音声言語による概念化された意味の伝達、音声言語による扇動の反復、プロバガンダを通して、政治性を帯びた民族意識の基盤となる、共属感覚の共属意識への転換を生む、重要な媒体ともなりうる。

(6) 視覚：図像、その一部としての文字のように、意味の分節化されたコミュニケーションの媒体となる。書く行為における指先の皮膚感覚や言語とも関連する文字コミュニケーションの、発信・受信における極度の能動性・個別性と結びつくと同時に、風景・漠とした光景の記憶など、知覚における受動性・集合性の面も視覚は併せもっており、共属感覚の重要な一要素となりやすい。視覚は二次元表象、その極致としての文字の読み書きと結びつく。ヒトの平らに並んだ両眼による近距離対象の、数万字の漢字の認知に見られる高度の識別能力と、両手の完全な自由が可能にした文字コミュニケーションは、分節化概念化された二次元表象の発信・受信における個別性、時間・空間の遠隔伝達可能性、反復参照可能性、発信・受信の一時停止の自由などの特質により、獲得された知識の詳細な伝達・洗練・蓄積に顕著な役割を果たす。

これら諸感覚のうち、視覚、聴覚、手の指先の触覚は、適応行動と創造行動を具現する大脳新皮質に結ばれており、分節的な認知能力があるので言語に対応しうる。嗅覚、味覚は、本能、情動を支配する、大脳辺縁系に直結しており、部分的にしか新皮質に行かない。そのために嗅覚、味覚は、分節的な視覚、聴覚、指先の触覚に対して、漠としているが強い、情動的な連想喚起力をもっている。

上に述べたことを通観して、感性の諸領域に、全体として次のような方向性を認めることができるだろう。

(1) から(6)へ移行するに従って、意識下の漠とした感覚、他者と共有される集合感覚から、自覚された「個我」の発達、大脳辺縁系から大脳新皮質への結

びつきの可能性が増す。

(6)から(1)へ移行するにしたがって、文化の集合的・持続的側面つまり本稿で以下に定義する「民俗」の、意識下での「個我」への拘束性が増す。

共感覚の基になる感性間の連合に、(1)から(6)のあいだで序列、方向性があるか、どの感性が発信体になりやすいかを、一概にいうことはむずかしい。慣用される比喩的言語表現は、一つの手がかりにはなるが、それも分節化、言語化が容易な(5)聴覚、(6)視覚が基になりがちであるとも必ずしもいえない。日本語の慣用表現だけについてみても、「臭い演技」(2)→(6)、「渋い演技」「渋い色」「渋い顔」(3)→(6)、「寒色」「暖色」(4)→(6)、「渋い喉」「甘いメロディー」(3)→(5)、「鋭い音」「軟らかい音」(4)→(5)、「黄色い声」「真っ赤な嘘」(5)←(6)、「乙な味」(3)←(5)、「甘い香り」(2)←(3)などの例がある。ただ(2)は、「臭い」という犯罪容疑にまで及ぶ広いマイナス・イメージをもった嗅覚表現を除けば、分節的言語化が極めてむずかしいために、共感覚の発信体としての言語表現にはなりにくいとはいえるだろう。嗅覚を的確に言語表現する必要がある調香の領域でも、フローラル (notes florales)、ウッディー (notes boisées)、オリエンタル (notes orientales) など、そしてウッディーも更に、dry woods (bois secs), oakmoss (mousse de chêne) に分かれるなど、当該の嗅覚と結びつきやすい具体的な事物の名を借りて指示される。

Ⅲ 文化、民俗、個人、個我、社会、地域を再定義する

これら感性の諸領域が生む表象は、ヒトが集団として生きる営みにおいて複合された表象の総体として、社会のなかで或る空間的拡がりや時間的な持続をもった「民俗」によって、多様な形をとりうる。ここで、これまで定義なしに用いてきた「文化」「民俗」「個人」「個我」「社会」「地域」という、本稿で鍵となる、そして従来必ずしも本稿における意味では用いられてこなかった概念を、定義する必要がある。私が感性にもとづく文化の再検討、再構築を試みるのも、先にⅡでも触れたが、以下に述べるような文化の担い手としての

個人と社会の関係、および文化における反復と変化の関係を明らかにする上で、感性を切り口にすることが有効ではないかと考えるからである。

本能にもとづくものも含めて、ヒトが生きる上での物質的・非物質的営みの総体を、最広義の「文化」と呼ぶとすると、文化は最終的には「個人」によって、それも必ずしも一貫性なしに担われ生きられているといえることができる。だが個人が担っている文化は、個人がそのなかで生を受け、生活する個人の集合である「社会」に営まれている「民俗」によって、意識されるいは意識されずに、影響され拘束されてもいる。

生きる営みのうちヒトだけがもつ二重に分節化された言語の習得は、物心のつきはじめから、幼児が接触する他者のことばを聞いて真似ることの繰り返しによって、調音基底 articulatory basis と呼ばれる、ある言語の発音の基本的特徴をなしているものを、調音器官諸部分の協調と運動連鎖の組み合わせの、条件づけられた身体技法として身につけ、言語としての基本コードを体系として意識しないにせよ習得することから始まる。個人によって多様でありうる言語活動も、発信者と受信者がコードを共有していなければ、分節化された音声コミュニケーションの媒体としての機能を果たすことができないからである。

だが成長につれて、個人の接触範囲は広がり、初次的言語の習得時に親密に接触してきた第一次集団以外から学習し、個人が創意によって生みだした表現も加わって、或る個人の言語世界は第一次集団のそれを超えることになる。味覚その他の感性においても、幼時に受動的に反復して慣れ親しんだものから独立して、広汎な選択と個人の創意にもとづいて、新しい要素が付け加えられてゆく。

このようにして、成人期以後の個人は、個性と自己主張をもった「個我」を形成してゆくが、それでも言語を始め、衣食住などのさまざまな生活領域、とくに嗅覚、触覚、作法としての身体技法が複合された「反射的忌避」、例えば異なる「民俗」における、入浴、排便の仕方や用具などを強要されてとっさに感じる、耐え難い気持ち悪さの感覚は、幼時からの「民俗」の条件づけによって、多分に意識下で個人を規制していると見るができる。

いわば「民俗」は、「個人」という実体の集合である「社会」という、組織をもつ有境の実体のなかに、或る拡がりを持続性をもって、だが最終的には「社会」を構成する「個人」によって、必ずしも一貫性なしに生きられている慣行 *habitus* の総体であり、各個人のうちで、「民俗」に対してむしろ自由と独自性を主張する「個我」と層序をなして、或る側面は意識されずに、共存している。ヒトの文化が含む反復と新しい変化の両側面は、それを享受する個人にとっても、慣れ親しんだものの与えるくつろぎと、新奇なものから受ける刺激、緊張の双方を求める、ヒトの心性に内在する指向の両極性（それは個人の一生でも、幼少期、青年期、熟年期、老年期などの時期によっても度合いを異にする）ともかかわっている。

言語、衣食住、生業、信仰、娯楽、等々、「民俗」を構成する多様な、それぞれが行われている社会のなかでの範囲が、相互に必ずしも重なり合わない慣行の一群は、有境の実体である「社会」の組織された範囲とも重なり合わずに、だが「社会」一般のうちに（しばしば、一定の組織をもつ「社会」の枠は越えて）、或る持続をもって、生きられているといえる。有境の実体ではない「民俗」は、入れ子状になって重層的かつ動的に「生きられて」いる。イエの民俗からムラヤサト、クニの民俗、それもそれぞれのなかで一枚岩としてではなく、個人や世代や年齢による差異を含んで、変化への契機を孕みながら、「生きられて」いるといえる。

ただ「社会」は、一般に組織をもち、構成者である「個人」に対しても、「文化」や「民俗」に対しても、世俗的な影響を及ぼしうるという意味で、重要な役割もっている。いま例に挙げた言語についても、実際に話されている言葉としては（陸続きの事例として、オランダ語とドイツ語のように）方言差があるだけで連続した、非有境の「民俗」であっても、「社会」の政治組織としての国家によって「国語」として制定され、学校教育、マスメディアその他を通じて強制され、常用されれば、体系としてのその言語は、社会と同じ有境の実体となる。

「地域」についていえば、かつての「文化領域」のような、或る特徴を示す文化と結びついた固定的、脱歴

史的なものとして「地域」を想定することは、事実在即してみても誤りであり、多様な文化、本稿での「民俗」が、交わり変化する動的な「場」として捉えられるべきである。そして「地域」は何よりもまず、そこに生きるヒトが、視覚、聴覚、皮膚の触覚、嗅覚、味覚を通して共通に感受する、眺望、大気の寒暖・乾湿・風雨、動植物相、衣食住のあり方と、それらの感性の表象に、基盤を与える。「地域」の地形、気候、動植物相と、そこで営まれる「民俗」との相互交渉のうちに、風土、風景が形成され、変貌してゆく。「地域」は「社会」と同じく、有境でありうる実体だが、空間の拡がりにおいて「民俗」と必ずしも固定的に対応しないことは、今述べたことから明らかであろう。

このように定義された「民俗」は、どのような手続きによって認識され、研究対象となりうるであろうか。「民俗」は、それを担って生きている当事者（個人）の意識された表明においては「規範」の束として、非当事者でありうる研究者の立場からは、或る時間幅のうちに観察された行動から帰納される「傾向性」として、捉えられるだろう。研究者が帰納した「傾向性」を、面接聞き取りなどによるフィードバックを通じて、当事者の「規範」と照合、検討することをくりかえし、古い時代については文献資料、図像資料をはじめとする非文字資料も参照して、問題関心によって異なる有意な時間幅（例えば、明治初年から昭和30年代後半の高度成長と生活形態の激変期までの、100年弱の期間のような、あるいはもっと長い、または短い時間幅）において研究者の立場から抽出された「指向性の束」として捉えることが可能であろう。その際、実体として有境の組織をもった社会における、多様で重層的でありうる「民俗」を問題にするか、ある「民俗」を社会の境界を越えて追求するかは、研究関心によって異なる。ただ、以下にもとりあげる「文化の三角測量」の方法においてのように、きわめて巨視的に捉えられた地域の文化を、集権的政治組織という「社会」を単位として、17世紀初めから20世紀半ばまでという300年余りの、有意な時間幅を設け、通時的な検討も踏まえた上で、研究者の視点から「指向性の束」として抽出されたものを対比し検討しようとする場合、「文化」をある一群の「民俗」を取り込んだ上位概念として、

だがヒトの文化一般に対しては下位概念として、「日本文化」「フランス文化」等、その場に応じて区別できるような形で用いることにする。

ヒトと他の生物とに連続して認められる感性の、だがその表象としての文化は、同一種の *Homo sapiens* が生みだした文化でありながら、多様な表現型を示している。その表現型のどのようなものが研究に値するか、私がこれまで「文化の三角測量」の方法によって、日本、西アフリカ、フランス等で調査してきた事例から、ヒトの文化を解明する上で、とくに重要だと思われるいくつかのものを、ここでは項目だけ、感覚別に以下に例示してみる。

嗅覚表象 薫香／液香。聞香、香道。匂いを表す語彙。

味覚表象 香辛料、油脂の素材と味。主食加工における粒／粉、乾／湿。ぬめりの有無。生／加熱。穀物酒（発芽、発酵）／果実酒。味覚を表す語彙。

触覚表象 浴法、油脂などの皮膚への塗布。触覚を表す語彙。

聴覚表象 音声表現における産み字、melisma 唱法の有無。器音における打音／持続音、打／弾／擦／吹の好悪。リズム、二、三、四…拍、付加リズム、polyrhythm、持ち入り八ツ拍子（謡）。単音／多音（harmony, polyphony, tone cluster, など）。聴覚印象を表す表音語（旧来の用語での擬声・擬音語）。

視覚表象 基本色名とその由来。顔料 pigment の種類と製法。単色および組み合わせられた複数色の象徴性。方位・季節と結びついた色。表意表句図像・表意文字／表音図像・表音文字。音声象徴性に対比しうる図像象徴性。手話。視覚印象を表す表容語（旧来の用語での擬容・擬態語）。

身体表象 舞踊における、描記的／律動的、one unit／polycentric、大地志向（反閤、shuffling）・上体前傾／天上志向・跳躍・直立。性交、排便、出産、埋葬の体位とそれにまつわる伝承。右と左のシンボリズム、右手と左手。身体表象の語彙。

共感覚 言語表現に投影された例。

総合された感覚 潔／不潔、浄／不浄の区別、反射的忌避感覚も、民俗によって培われた、きわめて根の深いものである。自然環境と民俗との、長い相互交渉の

結果として形成される、街道筋や里などの景観、諸感覚・生業・衣食住などを媒介として、民俗によって捉え返された自然である風土。ヒト（文化）の領域／野性（野獣、精霊）の領域（里・家／山・野、yiri/weogo, domus/silva 等）の区別なども、多様でありうる表現型の例として、研究対象になりうるだろう。

感性の面から分類した以上のような表象は、有形表象／無形表象などの物理的形態による分け方で検討することもできる。有形表象、物質文化については、ヒトの文化の研究にとって、それを形作る素材や技術が、自然条件と自然観・労働観との関係で、またその技術を実現し運用する社会・政治的人間関係や組織とのつながりで問題になり（私が提唱してきた「技術文化」という概念による総合的把握）、同時にそうした有形表象（家、社寺、記念碑、集落、共同の井戸や洗濯場・粉挽き場、伝承された道具など）が、ヒトの集合的な記憶の拠り所としてもつ意味が問われることになる。無形表象については、日常生活の身体技法（歩き方、座り方、眠り方、笑い方、泣き方、食事作法、挨拶の仕方など）、技術・儀礼の行為伝承、歌・語りの口頭伝承が、強い持続性をもって継承されており、民俗の基底としての意味も持っている。

IV 視覚二次元表象としての文字文化

ヒトの文化全体から見れば、歴史的な古さにおいても、地域的・社会的なひろがりにおいても、いわゆる文字と文字文化は、きわめて限られた場を占めているに過ぎない。それにも関わらず、生物のなかでヒトに特有の文字が、ヒトの文化で果たした役割はきわめて大きい。

文字文化の基底にあるのは、強い二次元指向だ。紙、木簡、竹簡、粘土板、パピルス、羊皮紙、石碑面、岩壁面、等々、二次元という、一次元、三次元、四次元の事象よりも、固定および固定後の処理・操作が容易で、視覚によって詳細に識別しやすい次元での記号化への指向がそこには働いている。大脳新皮質に多くつながる視覚、聴覚、指先の触覚のうちでも、弁別能力が大きい視覚への依存度が大きい。一次元の音、声、言葉、ものの移り変わり（時間）を、二次元に固定し

視覚化しようとする指向とも結び合わされている。西洋の五線譜に代表される楽譜は、主として音の高低、長短、強弱を表記し、音質表記を重視する日本の口唱歌や節博士と対照をなしている。日時計に始まる時計、カレンダー、年表などは、すべて時間の二次元表象化であり、レコード、磁気録音装置も、一次元の音の変化を二次元表象に固定して、反復参照、操作、修正が可能にする行為だ。地図、設計図（平面図、立・断面図）も、サイズや次元の減縮によって、対象の認識や検討を容易にする。このような面で、文字を含む二次元表象は、文化のある面での精練、伝達、蓄積に、大きく貢献した。

ただ、四次元の身体表象である舞踊は、モーションキャプチャーなど、いくつかの特徴についてのグラフ化は可能でも、総合された形で二次元への転換は著しく困難だ。現在までその最も優れた方式とされている Labanotation も、細密で分析性が高いだけに、余程この方式に習熟した者でないと、記録することも、解読することもできない。音の記録が、楽譜の形で舞踊の身体動作と並行する形で組み込まれないという欠陥もある。構成要素として約束事の多い日本舞踊は、簡単な図示と文字化された言葉で、かなりの程度の二次元表記が可能だが、さまざまな舞踊譜が試みられてきたにもかかわらず、決定版はない。

南インドのバーラタ・ナーティヤムでは、二次元の記譜法はまったく存在せず、動作の一連に対応する固有の口唱歌があり、手で拍子を取りながら口唱歌だけで全曲の動きを歌う。つまり、四次元表象を一次元に減縮した記譜法といえる。創作舞踊においても、振付け師による「振り移し」という等身大の模倣が、現在でも最も適切な方法とされている。エクリチュール、文字に記すという、身体から外在化させた記号によって時間性を奪い、ある心象を固定する行為の対極にあるものが、時間のなかに全身を投入して心象を生きる律動的ダンスであるという川田仮説は、文字に書かれた聖典をもつ大宗教と、それと拮抗関係にある踊りの問題にまで展開する可能性をもっている。

狭義の文字の起源を、アジアの東西に大別した場合、いずれも始源においては象形性から始まって、西では表音性と社会的機能では行政・契約へ特化し、東では

漢字の表意性と社会的機能は甲骨文字におけるような卜占に始まって、表意性をとどめたまま、中国と日本では用いられつづけている。原初の象形性においても、西で最古のメソポタミアの楔形文字のもとになった絵文字ではきわめて即物的で、例えば男、女が、それぞれ性器の象形で表されているのに対し、漢字の「男」は「田」と耒（すき）の象形である「力」の組み合わせ、「女」は女性が跪いた象形というように、社会的意味を強く帯びている。

さらに注目すべきは、表音性に進んだ西の文字が、その到達点であるアルファベットのようになり、閉鎖系を成す限られた数の構成要素によって、すべての言葉を表記できる書記体系を形作っているのに対して、表音性を保った東の漢字は、日本で作られた国字をはじめ、意味を担った部首の組み合わせによって追加可能な、開放系だということである。

ある範囲の対象を閉鎖系として捉え、単純な構成要素に分けた上で、その組み合わせとして対象を理解するという、原子論に代表される、アルファベットの書記法と通底する認識法は、西洋に発達し、いわゆる近代文明の基礎の一つとなったものである。これと併存して、非西洋世界に広く認められる、既知のものを比喩的に未知の対象にあてはめ、つまり「なぞらえ」「はかって」、新しい意味を対象に付与してゆくという、詩的言語の役割とも共通する認識法があると私は考えており、この二つの認識法が提起する問題は、アルファベット対漢字の文字論を超えた思考方法論とも関わっていると思われる。

文字および文字文化の基本的な特質を、音声言語との対比で挙げれば、Ⅱでも触れたが、次の4点に要約される。①時間空間における遠隔伝達性、②同一メッセージの反復参照可能性、③個別参照可能性、④発信受信過程での中途休止の自由。

西アフリカの王制社会に王の系譜伝承を伝達・広報する手段として発達した「太鼓言葉」は、①②の性質を文字と共有し、しかし主として音声言語の分節的特徴 segmental features を消して、超分節的特徴 suprasegmental features ないし韻律的特徴 prosodic features で意味の伝達を行う点で、私は裏返された文字、「マイナスのエクリチュール」と位置づけてきた。

しかし、③④の特徴をもたない点で、文字が人類文化のある側面での洗練、蓄積に果たした役割は、太鼓言葉はもちえないといえる。ただ、歴史認識の表象のあり方として、私が「文字」と「声」を対比させ、叙事詩（声で過去を現在に甦らせる）と年代記（文字で現在を過去に送り込む）という典型概念を設けて論じてきた観点でいえば、太鼓言葉による歴史表象は、文字と声とは異なる第三の位置を占める。

このような視野で文字と声と太鼓言葉を論じる場合、私は従来慣用されてきた「かく」に代えて、「しるす」という動詞を用いたい。文字の始源となった粘土板に刻んだ楔形文字も、甲骨に刻んだ漢字も、「掻いた」のであり、ヨーロッパ諸語で「書く」を意味する多くの語のもとになった、ギリシャ語の *graphô* や、ラテン語 *scribere* の印欧語源も「掻く」という意味だ。それに対して「しるす」は「著くする」ことであり、声や器音で祖先の名を顕彰する、上記「叙事詩モデル」につながる行為として、「名」が「文字」と同義である由縁も裏書きする。

①の時間における遠隔伝達性を考える上で、とくに歴史意識との関係で、伝達の媒体は重要だ。太鼓言葉のような器音を打つ身体伝承や、歌・語りの口頭伝承、舞踊・儀礼などの身体伝承では、伝承の単位は人間の一生だが、二次元表象の文字では、紙から石まで、メッセージの記された材質の持続度に著しい変差がある。秦の始皇帝が己の偉業を刻ませた石碑文が、紙に書き写し継がれて後世に伝わったように、時間的な遠隔伝達性の大小は、メッセージの媒体そのものの持続度とは無関係だ。文字資料によって人類文化を探求しようとするときの、非文字資料との関係の多面性の一部も、そこに由来している。石の碑文の一回性に対して、書き継ぎ、語り継ぎなどの反復再生による継承は、伊勢神宮の式年遷宮に見られる形象メッセージの時間遠隔伝達性と同じ指向に支えられている。

V 比較の二方法

人類学として、ヒトの文化を研究対象として設定するとき、そのさまざまな部分の比較研究が不可欠だ。文化の比較には、私は、連続のなかの比較と断絶にお

ける比較とが必要であると思う。連続のなかの比較では、歴史的な相互関係をもつ文化の、影響、伝播、受容、非受容、変形、などが問題になる。他方、私が提唱してきた「文化の三角測量」のように、日本、フランス、西アフリカ内陸社会、とくにモシ王国というような、19世紀後半まで相互に直接の重要な接触がなく、それぞれ異なる指向性をもってきたような文化の、いわば断絶における比較は、ヒトにとっての文化の意味を根底において問う、前者の「歴史的」に対して「論理的」とでもいうべき、隠れた意味の発見に資する (heuristic) 価値をもっている。

地測からの比喩に基づく文化の三角測量には、ある文化を対象とするとき、参照点を二つとることで相互の対象化と同時に相対化を容易にするという考えと共に、三角点を増やしてゆくことによって、ヒトの文化全体を覆うことを目指すという願望も籠められている。いうまでもなくそれは、さまざまな文化に属する、多くの研究者の協力によってのみ、可能になることだ。

VI ヒト中心主義は超えられるか

このようにアムエバからヒトまでを共通の視野に収め、そのなかでヒトとその文化のあり方を問うことによって、ヒトの存在自体を自然史のなかに位置づけ、現代以後の緊急課題である種間倫理の問題にも接近する道が開かれるだろう。それは、文化をもった生物としてのヒトに、全体としての見通しを与えるという従来の最広義の人類学の立場を、さらに一歩進めようとするものである。

18世紀のリンネによる生物の分類以後、サピエンス、「知恵のある」という形容を自らに付したヒトは、1万年前西アジアに農耕牧畜を作りだした。それまでの採集狩猟の遊動生活とは異質なこの「食料生産革命」は、西アジアだけでなく、地球上の他のいくつかの地域でも、遅れて異なる形で起こり、急速に拡がり、人口の激増、都市や王国、人による人の支配、組織的な戦争を人類にもたらした。人類史上最大規模の殺し合いを行った20世紀のあと、国民国家の枠で覆い尽くされた地球上で、僅かに生き残った採集狩猟の遊動生活民は、60億人余にまで増大した強力な食料生産民の末

裔たちによって、辺境に追いつめられ、生業も生活形態も放棄せざるをえなくなっている。

その間、「知恵のある」ヒトは、利己主義の元である自己中心主義 egocentrism, その拡大された形態である自民族中心主義 ethnocentrism を、少なくともたてまえとしては否定し、コペルニクスから19世紀のレオン・フーコーにいたる400年余りの、ヨーロッパの学者たちの国際協力によって、天動説 geocentrism, つまり地球中心主義を葬った。次は自然史の視野で、ヒト中心主義 anthropocentrism が否定されなければならない。全能の神が己に似せてヒトの祖先を創り、そのヒトに奉仕させるべく他の生物を創ったという、ヒトを生まれながらの生物界の支配者と見る「創世記パラダイム」は、それに続く「産めよ、増えよ、地に満ちよ」という神の意志が成り立ちえなくなったのと同じ意味で、存立不可能になった。

ヒトは、その文化を用いた適応の結果、単一の生物種としては、おそらく生命史始まって以来の増殖を遂げ、他の生物種を絶滅させたり、虐待したりして来た。日々多くの種が、ヒトの存在の犠牲になって地球上から消え続けている現在、われわれホモ・サピエンスがその文化の発達の当然の帰結として見出さなければならない種間倫理とは、資源枯渇や環境破壊を防ぐために、つまりヒトのよりよい存続のために、ヒト以外の生物種を守るというものであってはならないだろう。だが、種間倫理を構想する主体そのものがヒトである以上、そのジレンマをどう克服するか、人類学をはじめとするヒトの知恵に、課せられた重い課題だ。

注

本稿は、きわめて大きな課題について、まず全体の見取り図を描くことを目的として書かれた。そのため、個々の論点について、その都度参考文献を挙げることをしなかった。以下に本稿でやや特殊な意味で用いているいくつかの概念や論点について、私がすでに発表したものを記すが、全体の構想、およびここで定義された「個我」「民俗」の概念は、本稿で初めて提出したものである。また、本稿の構想をまとめる上で、霊長類学について西田利貞氏、舞踊について森下はるみ氏、感覚と脳の関係について養老孟司氏、嗅覚と香りの文化についてはフランスの高名な調香師Michel ROUDNITSKA氏との、それぞれ個人的な対話から多くを学んでいるが、ここに書かれたことについての責任が私だけにあることはいうま

でもない。

共属感覚と共属意識 「『民族』概念についてのメモ」『民族学研究』63巻4号, 1999

「個我」の形成 『聲』ちくま学芸文庫, 1998 [1988] : 17 「声とベルソナ」

技術文化・文化の三角測量『ヨーロッパの基層文化』岩波書店, 1995: 序「ヨーロッパ, 近代, 基層文化」; *The Local and the Global in Technology*, Paris, UNESCO, World Culture Report Unit, 2000; 『文化の三角測量-川田順造講演集』人文書院, 近刊

ヒト中心主義と種間倫理 川田他編『開発と文化』第3巻, 岩波書店, 1997: 「人間中心主義のゆくえ」; 「ヒトの欲望と種間倫理」『神奈川大学評論』48号特集「欲望の社会風景」2004; 『人類学的認識論のために』岩波書店, 2004: 第1章「ヒト中心主義を問い直す」

叙事詩と年代記 「叙事詩と年代記-語られるものと書かれるもの」『口頭伝承論』下, 平凡社ライブラリー, 2001 [1992]; "Epic and Chronicle - Voice and Writing in Historical Representations", in Sogner (ed.) *Making Sense of Global History*, Oslo, Universitetsforlaget, 2001 (reprinted in J. Kawada *Genèse et dynamique de la royauté*, Paris, L'Harmattan, 2002)

その他全般 『サバンナの音の世界』(カセットブック)増補改訂版, 白水社, 1998 [1984]; 『西の風・南の風-文明論の組みかえのために』河出書房新社, 1992; 『アフリカの心とかたち』岩崎美術社, 1995; 『口頭伝承論』上下, 平凡社ライブラリー, 2001 [1992]; 『人類学的認識論のために』岩波書店, 2004; 『コトバ・言葉・ことば』青土社, 2004; 武満徹と共著『音・ことば・人間』岩波書店, 1980; 『文化のなかの身体』岩波新書, 近刊